

歴史と民俗36

神奈川大学日本常民文化研究所論集 36

2020年2月19日発行
神奈川大学日本常民文化研究所編
発行所 株式会社平凡社

[要旨集]

■特集 《民具研究の新時代》

国際ハニ／アカ農耕器具の変遷

楊 六 金

呂 俊梅・江夏瑠霞・程亮（訳）

【要旨】

ハニ／アカ人は主に中国雲南省と東南アジアのベトナム、ラオス、ミャンマー、タイなどの国に分布している。他の民族と同様、時代の移ろいととも、農耕器具も変遷している。筆者は原始的農耕から現代的農耕まで、ハニ／アカ人の生産器具の変遷をまとめてみた。台地農耕から水田（棚田）農耕への発展は、ハニ／アカ人の畑作農耕の終わりを意味しているが、ハニ／アカ人の居住地がほとんど山地なので、耕作する畑の多くが山腹の斜面に位置している。そのため、高い効率の農耕機械を採用することは少ない。生活環境と耕作条件に制限されているからこそ、ハニ／アカ人の生産生活において、現代的農耕器具への転換は遅れており、伝統的農耕器具は依然としてその社会において生命力を継続していると考えられる。

民具から見る中国江南一農家の生活誌

張 正 軍

【要旨】

本論はフィールドワークと著者自身の農村生活の経験で、民具から見た中国江南一農家の生活誌である。その一家の民具には農耕、食料加工、料理、入れ物、運搬、寝具、信仰用などの用具があり、その材質としては竹細工、木製品、鉄鋼類が多い。本論ではそれらの用具から代表的な民具を取り上げて説明した。そこには自家製、職人製、工場製という民具の技術発展が見られる。その一家の農具は土地改革など時代の流れや生業の変化や使用者の世代によって変わっていく。そして、栽培植物が稲作・畑作から経済植物に変わると、農具もそれに相応しいものになる。農民は非農化し、都市部と農村部を往来し、農業が産業化し、農村は過疎化している。中国の農村では空洞化、空き家化、人口高齢化が激しく進み、高齢者はその体力が衰えたので、体力が必要な農具（民具）は廃棄され機械化が進んでいる。その廃棄された民具は農村部の観光資源としても利用されている。

中国少数民族の女神神話と図像叙事

——袋と縄の象徴性を中心に

金 善 子

神野 知恵 (訳)

【要旨】

文字を持たない民族は、象徴物を作る方式によって自分たちの思惟を表現する。そうした象徴物はひとつの「図像」となり、そのなかに「叙事」が込められる。それがまさに「図像叙事」である。図像叙事は、各民族の思惟と文化的特質をもとに、その図像の本質的な「意味」を探る観点から読み解かれなければならない。本論文では中国の少数民族の女神神話に関する図像のなかで、とくに子宮と臍の緒の象徴性を持つ「袋」「縄」と関連したイメージを中心に分析を試みた。満州族の「子孫袋」と「子孫縄」は「Futa omosimama」を、子孫縄を結んだ柳の木は「Fodo mama」を意味する。「子孫袋」は「子宮」、「子孫縄」は「臍の緒」を、柳の木は新しい生命を象徴する。シボ族の女神「Siri mama」もまた、綯(よ)った縄の形態で現れる。ホジェン族は「鳥の巣(Ome)」についての信仰を持ち、鳥の巣に似た「皮袋」も、子宮の象徴性を持つ。韓国の生育の女神である「サムスンハルマン」もやはり「セッキジュール(注連縄)」と「シルタレ(糸の束)」「パガジ(瓢箪)」等によって表象される。雲南省のナシ族の創世神話に、最初の間人が「縄」と「皮袋」のおかげで大洪水から生き残るという話が登場し、イ族の英雄である支格阿竜を祀る「祭龍」においても「縄」と「鳥の巣」が付いた松の木が重要な役割を担っている。ここでは「子孫袋」や「皮袋」、「鳥の巣」は最初の母を象徴し、「縄」は永遠なる「臍の緒」を意味する。

台湾原住民族パイワン族のアワ利用

——社会関係と物質文化を中心に

野林厚志

【要旨】

台湾原住民族であるパイワン族のアワ (*Setaria italica*) の利用行動の民族誌的記述をもとに、パイワン族のアワの利用行動を、東南アジアならびにオーストロネシア文化のなかでの位置付け、社会関係との密接なつながりと詳細な民俗知識の存在が、貨幣経済の浸透とともに慣習的な生業形態が大きく変わっていく状況にありながら、アワをめぐる物質文化が保守的なまま継続されてきたことを考察した。

台湾では、ほぼすべての原住民族社会においてアワが栽培されてきたが、そのアワをめぐる文化体系は民族ごとに違いが見られた。本稿の議論の中心となる東部パイワン族社会では、規模は小さいながらもアワの栽培が維持されてきた。その背景には、アワが多数派である漢族にとってマイナー・クロープであったこと、パイワン族社会におけるアワの宗教的、象徴的地位の高さがあり、パイワン族社会における保守的な栽培、利用を維持させてきたことが推察される。

■一般論考

方法としての民俗分布論の開拓

——民俗地図と柳田国男

安室 知

【要旨】

柳田国男は、一九三〇年代、民俗学を近代学問として打ち立てようとするとき、民俗学オリジナルな方法論として圏論を提起した。その過程で、柳田は方言語彙を用いて分布論を展開し、そして一枚の分布図を完成させる。それが『蝸牛考』（一九三〇年）に掲載された「蝸牛異称分布図」である。柳田にとってその図は圏論を説明するためのツールにすぎなかったが、同時にそれは日本民俗学にとっては初めて描かれた民俗地図といってよい。その意味で、柳田の場合、民俗地図は研究手法上、方法を生み出すための方法つまりメタ・ツールとして機能したことになる。

そのように、民俗地図に研究手法としての有効性を見出し、それを用いて研究史に残る大きな成果を上げたのが柳田国男であることは間違いない。柳田はその後、民俗分布を単に点で示すにとどまらず、面や線で分布を示すなど民俗地図の表現法をさまざまに模索している。それは、その時々、研究目的に合わせてなされたもので、後代に提示されることになる民俗地図の三類型にも通ずる民俗地図の描きわけとなっている。その結果、現在では民俗地図は圏論だけでなく、さまざまな研究に応用可能な一つの民俗学方法論として位置づけられる。

■一般論考

福島県内における近世の拍子田と太鼓田

——『会津農書』の拍子田と田歌を中心に

佐々木長生

【要旨】

貞享元年（一六八四）の『会津農書』には、「拍子田（ハヤシタ）」と呼ばれる中国地方の「大田植」に相当する記載がある。また、宝永元年（一七〇四）の『会津歌農書』には「拍子田」に歌われたとみられる「古田歌」の記載もある。一方、いわき地方にも「太鼓田」と呼ばれる「拍子田」に相当する田植えが、文政六年（一八二三）の文書をはじめ、明治一七年（一八八四）の地図や伝承にある。近世の東北地方において、「大田植」のような田楽の習俗が存在するという事は、民俗芸能史上稀であるというのが通説である。宝永元年当時において「古朝果敢（あさはか） 田歌」などの表記は、その歌詞の内容が中世期まで遡り得るという提唱もあり、新たな田植唄の研究資料という位置付けもされた。

田植唄の中世的世界を記載したとされる『田植草紙』と『会津歌農書』に記載された「古田歌」とを照合すると、その一部に類似した歌詞を見ることができる。また、文化一三年（一八一六）に編纂された「諸国風俗問状答」の中に収録されている田植唄および秋田・青森・岩手・宮城県に位置する田植唄を記載した菅江真澄の「ひなのひとふし」の記載の歌詞にも、『田植草紙』に通じうる歌詞を見ることができる。真澄は寛政七年（一七九五）の『津可呂（つがる）の奥（おく）』でも、「拍子田」のように「つづみ打声」と津軽地方の田植えの様子を記述している。このように、「拍子田」のような田植え習俗が、一八世紀後半の東北地方にも存在したのではないかという仮説に至った。

本稿では、『会津農書』の「拍子田」と『会津歌農書』および『会津農書附録』に記載された「古田歌」について、『田植草紙』はじめ各地の「諸国風俗問状答」に収録された田植唄の歌詞とを照合・分析することにより、「拍子田」および「太鼓田」の推移と、田植唄の系譜をたどることを目的にした。『会津歌農書』や『会津農書附録』の著者佐瀬与次右衛門のような、「文字をもつ伝承者」による「非文字資料」の「文字資料」化する変遷過程を例証することも、もうひとつの目的とした。

■一般論考

地方財閥と地域貢献

——山形県鶴岡風間家の事例

森 武麿

【要旨】

世界恐慌（昭和恐慌）、戦後改革（GHQ占領改革）、そして戦後社会の激動を生き抜いた地方財閥を対象としても一つの資本主義の道を考えたい。すなわち江戸時代から現代まで継続して事業を展開した稀有の地方財閥、山形県庄内鶴岡の風間家の経営行動と理念を通して、家業としての戦前の財閥から戦後の法人資本主義へ日本の特徴を持った企業経営がどのように形成されたのかを考察し、地方資本の経営理念と地域貢献の問題を考えることによって、現在の新自由主義的資本主義によって格差社会を引き起こした米英資本主義とそれに追随する日本資本主義を反省する契機としたい。